



丹羽家住宅（旧丹羽長）

新桐生駅の踏切をすぎて伊勢崎方面に向かうと間もなく、右手に卵色の長い塀と大きな松が見える。通称「丹羽長前」だ。丹羽長とは丹羽長右衛門の略称である。

先祖は織田信長に仕えた丹羽長秀と伝えられるが、桐生の丹羽家は「上広沢にあり、由良家家臣丹羽頼母の後にして、元和年中、監物（けんもつ）が大坂の役に出陣、後帰農して同所に住した」（桐生市史上巻）ところから史実に登場する。元文3年（1738）、丹羽佐七は家業を弟の長右衛門に譲り、絹買を専業として日本橋旅籠町に出店する。高山彦九郎と親交もあり、俳諧、狂歌、浄瑠璃を得意としていた。長右衛門の名は代々受け継がれ、それぞれ魯水、雅晁、木公という俳号も持ち、『真砂集』『ふきだし集』を編むなど文化的素養も継承された。

明治期の丹羽長右衛門は日本橋で生まれ、現在ミツバ本社がある場所に丹羽織物株式会社を起こした。三井物産との取引で朝鮮向けの織物を製織、敷地2千坪にノコギリ屋根工場が連なる大工場であった。大正3年（1914）に新桐生駅を寄付するなど事業は軌道に乗ったかに見えたが、第二次世界大戦が総力戦となってからは、織機の供出、資産の凍結、そして軍需工場として接收されて、丹羽織物は終焉を迎える。戦後、工場は三ツ葉電機製作所が利用することになる。同時に農地解放で広大な土地も失い、現在の屋敷が残った。

昭和30年（1955）、映画『善太と三平』の舞台として、その屋敷が宮津博監督の目にとまった。宇佐見諄、坪内美子、小山虎之助、往年の映画俳優がクランクアップ後、主屋の前で家族とともに収まった記念写真も残されている。

それから半世紀あまり、東日本大震災で3つの蔵の壁の一部が崩れた。いまだ2つの蔵と大きなお稲荷さんは痛んだままだ。重伝建地区以外の古民家にも経済的負担が少ない修復や新しい活用方法を考える時期に来ていると言えよう。

所在地 桐生市広沢町2-3111
所有者 丹羽 佳子